

第195回地震予知連絡会重点検討課題について

タイトル「プレート境界に関するわれわれのイメージは正しいか？（その3）」

相模トラフ周辺・首都圏直下」

趣旨説明者 京都大学防災研究所 遠田晋次

2011年東北地方太平洋沖地震により、日本海溝沿いの太平洋プレート沈み込みに伴う巨大地震発生に関するこれまでのイメージが一変した。首都圏周辺では、さらに南からフィリピン海プレートが沈み込み複雑さを増しており、プレート配置と大地震発生源を正確にイメージングできている状況ではない。また、関東地方は東北地方太平洋沖地震の影響を受けて地震活動が活発化しており、余効変動も続いている。短中期的には同地震の影響を避けた評価はできない。加えて、首都圏の人口過密域直下に沈み込み境界が存在するという世界でも特異な環境下にあり、大地震発生メカニズムの解明と適確な規模・頻度予測が急務となっている。

第195回地震予知連絡会重点検討課題の検討では、まず東北地方太平洋沖地震が関東地方の地震活動に与えた影響について最新のデータを持ち寄って、今後の短中期的な大地震発生の可能性を検討する。さらに、関東地方のプレート構造やすべり欠損に関する研究レビューを行うとともに、津波堆積物や地震性海岸隆起など古地震学的研究の最近の成果を紹介し、首都直下大地震の切迫性や相模トラフ沿いの巨大地震の規模と繰り返しについて検討する。